て湛水すれば、生息できなくなるが上下流や支流に残る好適な生息環境で繁殖するものと考えられる、と少し楽観的な表現で述べている。

サンショウウオ　これは生きた化石といわれまれな動物である。昭和の初めごろまでは祓川の上流地帆柱附近にもいたことが確認されていた。現在でも精査すればヒコサンサンショウウオの小さいのが生息しているはずである。

ツチガエル・トノサマガエル・ウシガエル（食用蛙）・ヒキガエルなどかなり見受ける。

ウシガエル　新柳瀬橋から崎山間の澱みに多く見られる。

ヒキガエル　俗にワクドと言う。今は多くはないが筆者の宅地内に昨年中に掌にのるぐらい、まだ子供だろうが居るのを見た。

ヒバカリヘビ　性質が荒くシマヘビに似ている。噛まれるとその日ばかりの命というのは迷信で、実際は無毒である。

マムシ　イノシシがこれを食うので少なくなったといわれるが、まだ数多く湿地に潜んでいる。

五　魚　介　類

アユ　今川・祓川いずれも多く棲んでいたが、魚毒に弱く農薬の関係もあり、一時途絶えた感があったが現在では少し見かける。しかし昔のような状況になることはないだろう。

コイ　これも大体同じ状況だが、農薬などにはアユより抵抗力があるので復活も早く、今はかなり多く見かける。

フナ　キンブナ・ギンブナ・ヘラブナ（ゲンゴロウブナ）等の種類がある。本庄池のヘラブナ釣りは多く、川でも五月の出水時期には大きいものが田の中へ迷いこむのをよく見かける。田の水口に群れていた小ブナの姿を見ない。

ライギョ　外国から持ち込まれたものが各地の池や川に一時繁殖し、他の魚を捕食するので養魚池の大敵だった。昭和三十年ごろまでいたがその後少なくなり現在は全くいない。

ダム環境調査では左記のものが確認報告されている。

カワムツ（ハエの類）・アユ・オイカワ（キンバエ）・カマツカ（ダンギボ）・ムギツク（クチボソ）・ヨシノボリ（ゴリ）・イトモロコ・ドジョウ、貴重種としてオヤニラミの生息が確認されたとある。

以上のほか今川・祓川にはナマズ・ウナギ・ドンコ・ギウギュ等の従来生息していた魚類も少ないだけで存在していると魚取業者から直接、話を承った。カチンコ・メダカ類もいるだろう。

カワカニ　モクズカニとともに川土手の穴・石積みの間などに必ずと言っていいほどいたが今は少なくなった。

サワガニ　これも近ごろ見かけるようになった。

エビ　テナガエビ、当地方ではガマンという。ヌカエビ（エビンチコ）なども全く見かけないが魚取業者の話のように段々、復活しているだろう。

シジミ　昔のようにたくさんいないが少しずつ殖えている。幼貝は黄緑色だが老成すると黒色となる。

ドブガイ　別名ヌマガイともいう。池沼・溝にいる黒色で殻は大きいが薄い。本町にはあまり多くいない。

カワニナ　巻き貝で殻頂は多くの場合欠損している。ホタルの重要な

餌であるからむしろ保護を要する。

タニシ　一時は絶えていたが、最近はよく見かける。稲の幼苗を食害するので駆除を要する。

キセルガイ　陸産の巻き貝の一種。木に登るものや落ち葉・石の間に棲む。戦前まではよく見かけ大木の根元に群がっていたが、現在では全く見ない。

六　カ　メ　類

イシガメ　池沼・川の浅い所や山地の谷川沿いに居る場合もある。それにしても当地方ではそうざらにいるわけではない。

スッポン　水中の泥に棲む。自然界のものは右と同じくめったに見ない。崎山の古門亀修庵は専門に飼育している。

七　そ　の　他

カタツムリ　普通デンデン虫とも呼ばれ、よく見かける。「つの出せ、やり出せ」の懐かしい童謡の愛嬌もの。

ナメクジ　殻が退化したカタツムリの一種。畑や朽ち木や家屋の内外、特に湿った所を好み、夜行性であるので駆除にてこずる。

ミミズ　雌雄同体の環形動物。落ち葉やゴミ溜めに棲む。掘り出して魚釣りの餌にする。

ヒル　水田や小溝に多くいる。伸縮性に富み前後に吸盤があり人間に吸いついて血を吸う。

ウジ　ハエの幼虫。腐った物や不潔な場所にハエが産みつけた卵によって発生する。

ムカデ　藪中や落ち葉の下に棲む。節足動物で猛毒があり、咬まれるとひどい痛みを覚える。農作物の害虫を食べるので益虫。

ゲジゲジ　ムカデに似た節足動物、猛毒は無いが頭を這えば毛が抜けるという言い伝えがある。ムカデより数は少ない。

ダニ　動物の毛の中、畳のほこりの中、山中の木から落ちて人間につくダニなど種々あるが、最近は薬剤撒布や掃除機の普及でほとんどいなくなった。

参考文献

『英彦山』（田川郷土研究会）、『福岡県植物誌』（福岡県高等学校生物研究部会）、『原色野草図鑑』（保育社）、『学研生物図鑑』「伊良原ダム環境調査報告書」『福岡県の植物』

第二節　植　物

犀川町の植物相　英彦山を頂点として、放射状の山系が北方に延びており、築上郡境の山並みや蔵持山・帝釈山から大坂山に連なる山並みが犀川町を包み、その谷間をうるおして今川・祓川が周防灘へと注いでいる。

犀川町の総面積は九七・九七平方キロメートル、その七割は森林と原野であり、そこに生育している植物は三〇〇種以上もあるだろう、それを逐一掲記することは至難の業であるから、常識的な一般調査の範囲になるこ